

精神保健福祉援助実習前後での 実習生のコミュニケーション技術の評価分析

大西 良¹⁾・辻丸秀策¹⁾・藤島法仁²⁾・占部尊士²⁾
大岡由佳²⁾・末崎政晃²⁾・福山裕夫¹⁾

The analysis of evaluation with social welfare student's communication skills in practical training

Ryo OHNISHI, Shusaku TSUJIMARU, Norihito FUJISHIMA,
Takashi URABE, Yuka OOKA, Masaaki SUEZAKI, Hiroo FUKUYAMA

【抄録】本研究では、精神保健福祉援助実習に参加した学生を対象に、コミュニケーション技術評価尺度を用いてコミュニケーション技術の達成度を測定し、実習前後での変化を明らかにすることが目的であった。調査の結果、①コミュニケーション技術を評価する全25項目のうち、11項目で変化がみられ、いずれも実習後に肯定的な評価であった。②コミュニケーション技術評価の5つの下位因子のうち、「コミュニケーションの基本技術」「非言語的コミュニケーション技術」「クライアントの感情の明確化」の3つで技術の向上がみられた。③5つの下位因子のうち「コミュニケーションによる自己成長についての理解」でのみ、「友人のサポート」と「実習中の相談相手の有無」の関連性が確認された。

以上の結果を踏えて、コミュニケーション技術評価を実習後の振り返り学習に活かす実習指導のあり方、学生への具体的な教育的支援について論じた。

【キーワード】コミュニケーション技術 精神保健福祉現場実習 自己評価

はじめに

1997年(平成9)年12月に精神保健福祉士法が成立し、Psychiatric Social Worker(以下PSWと略す)が「精神保健福祉士」として国家資格化され10年(平成19年現在)の節目を迎えた。荒田¹⁾は、国家資格化以前と比べて精神障害者の福祉の支援の質の向上が図られ、精神科医療と地域リハビリテーション、社会復帰に関する円滑な連携がなされるようになったと報告している。また、宮崎²⁾は、国家資格化に伴って精神障害者の平均在院日数の減少や精神障害者の生活の質の向上が大いに期待されるとともに、精神障害者の社会資源の増加や生活場の広がりによって精神保健福祉士の職域も拡大していくと述べている。このように国家資格化によって精神保健福祉専門職の質の向上や職域の拡大などの新たな展開もみられ、精神保健福祉士を養成する教育

機関では、それらに対応した教育方法、教育内容が問われている。特に、精神保健福祉養成教育の中でも実践を通じて学習する精神保健福祉援助実習(以下、「現場実習」とする)については、多くの研究者あるいは実務者によって様々な視点から検討がなされている。

近年の現場実習に関する研究は、実習の受け入れ体制、実習指導者の指導方法や内容、実習の評価など、実習教育システムに関する研究が多くみられる。しかしながら、実習の主役である実習生の変化や成長に焦点をあてて、それらを明らかにしたものはまだまだ少ない。そのため、実習生の実習過程での変化や成長の様子を明らかにすることは大変意義あるものだと考える。

また、現場実習では、精神障害者やその家族への援助を考え実践することに加え、その援助過程を通じて自己の内面への変化を洞察し、自己理解や福祉

¹⁾久留米大学 文学部社会福祉学科

²⁾久留米大学大学院 比較文化研究科

専門職観を明らかにすること³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾，さらに，様々な実習体験から学生は自己への気づき，理解を深めていくこと⁷⁾⁸⁾⁹⁾になる．したがって，現場実習ではコミュニケーションを通じた学びが非常に重要な要素となり，クライアントに適した福祉の実践は，コミュニケーション技術に左右されると言っても過言ではない．

ところで，「コミュニケーション」とは二者間または複数間で考えや感情を伝え合うことを言い，コミュニケーション技術は援助実践の基礎となる相互関係を成立，発展させるための基本的な技術である¹⁰⁾．そしてその技術を展開するに当たり，対人関係が大きく影響し，援助者の人間性が何らかの形で表出され，精神科領域においてコミュニケーションは治療そのものである¹¹⁾．また，Figure. 1に示すように，実習生のコミュニケーション技術に対する関心度は高く，その技術の向上を精神保健福祉現場実習の目標にあげる学生は多い．しかしその一方で，学生は「クライアントとうまくコミュニケーションがとれるのか」，「コミュニケーションの取り方が分からない」など，精神障害という特性によりコミュニケーションに関する困難さも感じることも多い¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾と報告されている．

これまでの精神保健福祉援助実習を含む福祉実習において，「コミュニケーション」をテーマにした研究は比較的多い．特に，精神保健福祉領域におけるコミュニケーション評価については，現場実習における学生の学びのプロセスとして，コミュニケーションはクライアントとの相互作用における学生自身の自己洞察を導くものとして機能すること¹⁵⁾¹⁶⁾，コミュニケーションは意思の伝達手段としてのみで

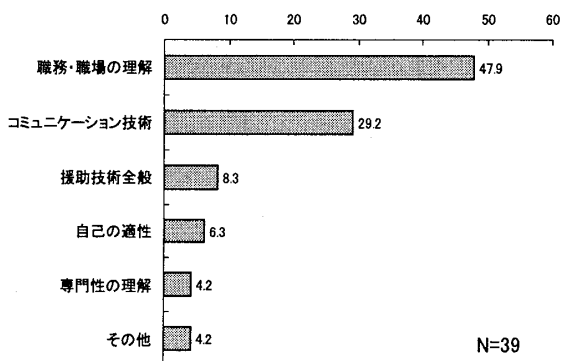


Figure. 1 実習生の目標設定項目

はなく，相手に関与する手段でもあること¹⁷⁾，コミュニケーションによって，クライアント-援助者間に起こる様々な出来事に対して，自己を客観的に見つめ直す機会を得ること¹⁸⁾¹⁹⁾などが報告されている．

以上のことを踏えて，本研究では，精神保健福祉士養成課程の学生を対象に，「対人コミュニケーション技術評価尺度」を用いてコミュニケーション技術の達成度を測定し，現場実習前後での変化を分析することが目的である．

対象と方法

1. 調査対象

本研究では，4年制大学の学生で現場実習に参加した学生39名（以下，「参加群」とする）と，同大学の学生で精神保健福祉援助実習に参加しなかった学生30名（以下，「非参加群」とする）を調査対象とした．

なお，両群の内訳は，参加群で男子学生11名，女子学生28名，非参加群で男子学生13名，女子学生17名であった．

2. 調査時期

参加群への調査は2007年5月～10月にかけて，個別の学生の実習時期に合わせて実施した．また，非参加群への調査は，2007年7月に実施した．

3. 調査内容と手続き

本研究で用いた調査用紙は2部構成となっている．第1部はフェースシートで実習に関する基礎的質問であり，第2部は達成動機を尋ねる内容であった．具体的な内容については以下に示す．

1) フェースシート

フェースシートの部分では，実習生の性別，年齢などの基本属性に加え，「実習の不安」「友人，教員，現場実習指導者のサポート」「実習中の相談相手の有無」「精神保健福祉分野での就労，仕事内容への魅力」「実習での不快な体験の有無」「精神保健福祉ボランティア等の事前体験の有無」といった現場実習に関する基礎的な質問項目を設けた．

有無を尋ねる設問については，「あった」「なかっ

た」の2件法で評定を行い、その他の設問については、「とてもそうであった」「ややそうであった」「あまりそうではなかった」「まったくそうではなかった」の4件法で評定を行った。

2) コミュニケーション技術尺度

コミュニケーション技術の評価に用いた尺度は、上野²⁰⁾によって看護学生用に開発された「コミュニケーション技術評価スケール」と、八田ら²¹⁾が開発した「現場で活かすコミュニケーションスキル判定シート」を参考に、福祉学生向けの対人コミュニケーション技術評価尺度を作成して使用した。

この尺度の質問項目は全部で25項目あり、「コミュニケーションの基本技術」「非言語的コミュニケーション技術」「コミュニケーションによる自己成長についての理解」「クライアントの感情の明確化」「コミュニケーションに関わる人間観の理解」の5つの下位因子から構成されている。評定は1点から5点の5段階で行い、下位尺度ごとに項目を合計した得点が算出される。

調査の手続きとしては、調査用紙の配布と回収は、学生各々の実習時期に合わせて、実習開始日1週間前（実習前）と実習終了日から1週間後（実習後）の2度行った。

4. 分析方法

まず、本研究で用いる対人コミュニケーション技術評価尺度の信頼性・妥当性を検討するために、Cronbachの α 係数を求めて内的一貫性を検証した。また、対人コミュニケーション技術評価得点が正規分布であるか否かを確認するためにShapiro-Wilkの正規性の検定を行った。その後、現場実習前後での変化を検討するために、対応のあるt検定を行った。

なお、一連の集計および統計処理には、統計パッケージSPSS14.0J for Windowsを用いた。

5. 倫理的配慮

調査対象の学生に対しては、調査への協力依頼文書の中で、調査の目的、調査協力はあくまでも任意であり成績や実習評価とは一切関係のないこと、回答結果はコンピュータ処理されて個人の回答が外部

に知らされることはないこと、結果は学術的な目的以外には使用しないことなどを明記した。

また、調査結果については、個別にフィードバックを行い、実習後での自己評価や振り返りなどの実習後学習の一指標として役立ててもらった。

6. 用語の操作的定義

社会福祉用語辞典によれば、コミュニケーションとは「記号を介して一定の意味、内容を伝達し合う過程」とされている。また、看護学大辞典によると、コミュニケーションは「個人の内的経験をシンボル化して伝達し、相手はその意味を再現して認知する過程を相互に連続的ないし動的に繰り返すことで、人間相互の関係を成立・発展させる過程」とされている。援助実践者にとってのコミュニケーションについて、田尾は²²⁾「コミュニケーションを個人間の過程として捉えるならば、ある個人がその意図を誰かに伝える過程であり、そこには、送り手、その人が送ろうとしているメッセージ、それを送るための媒体、それを受け取る受け手の4つの要素の繰り返しがコミュニケーションである（Figure.2）」と説明している。

以上のことから、コミュニケーションは、援助実践においてクライアントへの理解を深め、関係を発展させる過程であり、また同時に自己の姿勢や態度をみつめる過程であると定義する。

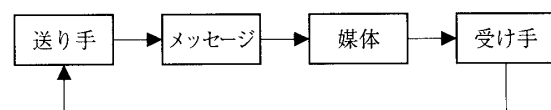


Figure.2 コミュニケーションの過程

結果

1. フェースシートの設問項目の集計結果

ここではフェースシートで尋ねた項目について、集計した結果をそれぞれの項目ごとに示す。まず、現場実習に関する基礎的設問については、「実習に対する不安」では、「とても感じていた」が51.3%、「少し感じていた」が48.7%で、全員が少なからず実習に対する不安を抱いていた（Table.1）。

Table.1 実習に対する不安について

	とても感じ ていた	少し感じて いた	あまり感じ ていなかった	まったく感 じていなか った
実習に対する不安	51.3	48.7	0	0

N=39

「実習中の相談相手の有無」については、「相談相手があった」と回答した学生は9割以上(92.2%)であった(Table.2).

Table.2 実習中の相談相手の有無について

	いた	いなかった
実習中の相談相手の有無	92.2	7.8

N=39

「実習中の人的サポート」については、「友人からのサポートを多く得ることができた」と「得ることができた」を合計すると、83.2%の学生が実習中に友人からのサポートを得ることができたと回答していた。「教員からのサポート」、「現場指導者からのサポート」についても、「多く得ることができた」と「得ることができた」を合計すると、9割以上の学生でサポートを得ることができたと回答していた(Table.3).

Table.3 実習中の人的サポートについて

	多く得ることが できた	得ることが できた	あまり得る ことができ なかった	まったく得 ることがで きなかった
友人のサポート	54.6	28.6	13	5.2
教員のサポート	52	41.6	7.8	0
現場指導者のサポート	44.2	49.4	5.2	2.6

N=39

「精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習の有無」については、約7割(70.2%)の学生で事前にボランティア等の事前学習の機会を得ていた(Table.4).

Table.4 精神保健福祉ボランティア等の事前体験学習の有無について

	あった	なかった
精神保健福祉ボランティア等の事前体験の有無	70.2	31.2

N=39

「精神保健福祉分野での仕事内容に関する魅力」、「精神保健福祉分野での就労に関する魅力」については、どちらもほぼ全員の学生で魅力を感じていた(Table.5).

Table.5 精神保健福祉分野での仕事内容、就労に関する魅力

	とても魅 力がある	魅力があ る	あまり魅 力がない	まったく 魅力がな い
精神保健福祉分野の仕事内容に関する魅力	51.3	48.7	0	0
精神保健福祉分野での就労に関する魅力	48.7	48.7	2.6	0

N=39

「これまでの実習経験での不快体験の有無」については、「ある」が66.7%、「ない」が33.3%で、6割以上の学生で不快な体験をした経験があると答えていた(Table.6).

Table.6 これまでの実習経験での不快体験の有無について

	ある	ない
これまでの実習での不快体験の有無	66.7	33.3

N=39

2. コミュニケーション技術評価スケールの信頼性および妥当性

コミュニケーション技術評価得点におけるCronbachの α 係数は、『コミュニケーションの基本技術』で0.91、『非言語的コミュニケーション』0.88、『コミュニケーションによる自己成長についての理解』で0.73、『クライアントの感情の明確化』で0.82、『コミュニケーションに関わる人間観の理解』で0.63という数値であり、内の一貫性を証明することができ、その後の検定に耐え得ることが確認された(Table.7).

3. コミュニケーション技術得点の平均値とその差の検定結果

現場実習前後でのコミュニケーション技術評価得点をTable.8に示す。対応のあるt検定の結果、有意差のみられた項目は、「クライアントの感情や

Table. 7 コミュニケーション評価尺度の因子構造と内的一貫性 (α 係数)

因子項目	項目数	α 係数
1 コミュニケーションの基本技術	13	0.91
2 非言語的コミュニケーション技術	3	0.88
3 コミュニケーションによる自己成長についての理解	4	0.73
4 クライアントの感情の明確化	3	0.82
5 コミュニケーションに関わる人間観の理解	2	0.63

態度をありのままに受け止めることができる」(t(38)=2.43), 「クライアントの表現した内容または問題のオウム返しができる」(t(38)=2.44), 「クライアントの考えに添った進め方ができる」(t(38)=2.65), 「クライアントのプライバシーを保持することを適切な言葉で言うことができる」(t(38)=2.58), 「クライアントとの信頼関係(ラポール)を成立させることができる」(t(38)=2.10), 「クライアントに対して自由に話をしてもらえる問いかけができる」(t(38)=2.48), 「クライアントの‘今ここで’経験していること、心の動きを大切にす

Table. 8 コミュニケーション評価得点の平均値とその差

	実習前		実習後		平均値の差 (実習後- 実習前)	t 値	有意差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
1 クライアントの感情や態度をありのままに受け止めることができる	3.07	0.88	3.53	0.64	0.46	2.43	*
2 クライアントの表現した内容また問題のオウム返しができる	3.13	1.06	3.87	0.64	0.74	2.44	*
3 クライアントの考え方に添ったすすめ方ができる	2.80	0.78	3.47	0.99	0.67	2.65	*
4 クライアントのプライバシーを保持することを適切な言葉で言うことができる	3.27	0.88	4.00	0.66	0.73	2.58	*
5 クライアントとの信頼関係(ラポール)を成立させることができる	3.07	0.80	3.47	0.74	0.40	2.10	*
6 クライアントの話を傾聴することができる	4.07	0.80	4.20	0.56	0.13	0.70	
7 クライアントの自己決定を尊重してすすめることができる	3.53	0.64	3.60	0.91	0.07	0.32	
8 クライアントに対して自由に話をしてもらえる問いかけができる	3.00	0.76	3.53	0.64	0.53	2.48	*
9 クライアントの内面に焦点をあて、共感することができる	3.13	0.83	3.33	0.90	0.20	0.90	
10 自分自身を偽らず、言葉や行動に一貫性をもって関わるすることができる	2.80	0.94	3.00	0.76	0.20	0.82	
11 クライアントが前向きな考えを示したときには、それを支持してすすめることができる	3.80	0.78	4.07	0.46	0.27	1.29	
12 コミュニケーションは問題解決よりも、プロセスを大切にすることができる	3.20	0.86	3.47	0.64	0.27	1.74	
13 クライアントの「今ここで」経験していること、心の動きを大切にすることができる	3.07	0.70	3.73	0.59	0.66	2.47	*
14 クライアントの表情の変化などに注意することができる	3.33	0.98	3.87	0.64	0.54	2.09	*
15 必要に応じて身体をさするなどの非言語的コミュニケーションを活用することができる	2.93	0.88	3.33	0.98	0.40	1.87	*
16 クライアントに対して偽りの希望を持たせるようなことは言わない	2.87	0.99	3.13	0.83	0.26	0.85	
17 コミュニケーションによって自分自身を成長させることができる	3.93	0.70	4.07	0.70	0.14	0.52	
18 人間は成長し変化しつづける存在であると理解している	4.13	0.74	4.13	0.52	0.00	0.00	
19 自分自身を尊重することができる	3.13	0.83	3.00	0.76	-0.13	0.52	
20 人間は自己実現できることが最高の望みであると理解している	3.13	0.99	3.60	0.51	0.47	1.71	
21 クライアントがはっきりと表現できない感情を明確化できる	2.27	0.70	2.80	0.86	0.53	2.48	*
22 クライアントの表現した内容または問題を要約して言うことができる	2.60	0.63	3.00	0.85	0.40	2.10	*
23 クライアントの沈黙の意味を理解し、的確に対応できる	2.73	0.70	3.20	0.78	0.47	1.97	
24 人間は自分で考えたり行動したりする主体性をもつ存在であると理解している	3.67	0.49	3.67	0.49	0.00	0.00	
25 人間は人間同士が相互に影響しあう存在であると理解している	3.87	0.74	4.20	0.68	0.33	1.44	

* p<.05

ことができる」($t(38)=2.47$), 「クライアントの表情の変化などに注意することができる」($t(38)=2.09$), 「必要に応じて身体をさするなどの非言語的コミュニケーションを活用することができる」($t(38)=1.87$), 「クライアントがはっきりと表現できない感情を明確化できる」($t(38)=2.48$), 「クライアントの表現した内容または問題を要約して言うことができる」($t(38)=2.10$) の11項目であり, 約半数の項目で変化がみられた。特に, 現場実習前後での平均値の差が0.7以上と変化の大きかった項目は「クライアントの表現した内容または問題のオウム返しができる」, 「クライアントのプライバシーを保持することを適切な言葉で言うことができる」であった。また有意差は見られなかったものの「自分自身を尊重することができる」という項目のみで実習後の平均値が低下していた。

4. 実習前後でのコミュニケーション評価因子の変化

ここでは, コミュニケーション技術評価尺度の各下位因子の実習前後での変化ならびに非参加群との比較を行った結果を示す。

まず, 「コミュニケーションの基本技術」については, 実習前の平均値は41.93であったのに対して実習後には47.27と上昇し, 11%の技術向上がみられた。また, 非参加群との比較においても, 実習後に技術の向上がみられることが明らかになった (Figure. 3)。

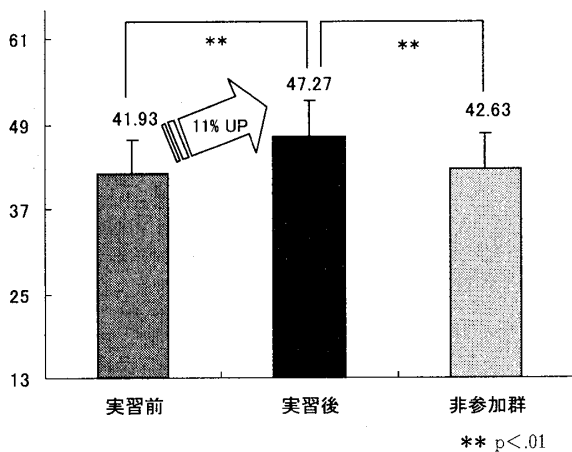


Figure. 3 実習前後での『コミュニケーションの基本技術』の変化

「非言語的コミュニケーション技術」については, 実習前の平均値は9.13であったのに対して実習後には10.33と上昇し, 11%の技術向上がみられた。また, 非参加群との比較においても, 実習後に技術の向上がみられることが明らかになった (Figure. 4)。

「クライアントの感情の明確化」については, 実習前の平均値は7.60であったのに対して実習後には9.00と上昇し, 15%の技術向上がみられた。また, 非参加群との比較においても, 実習後に技術の向上がみられることが明らかになった (Figure. 6)。

その一方で, 「コミュニケーションによる自己成長についての理解」と「コミュニケーションに関わる人間観の理解」に関しては, 現場実習前後では統計的に有意な変化は認められなかった (Figure. 5, Figure. 7)。

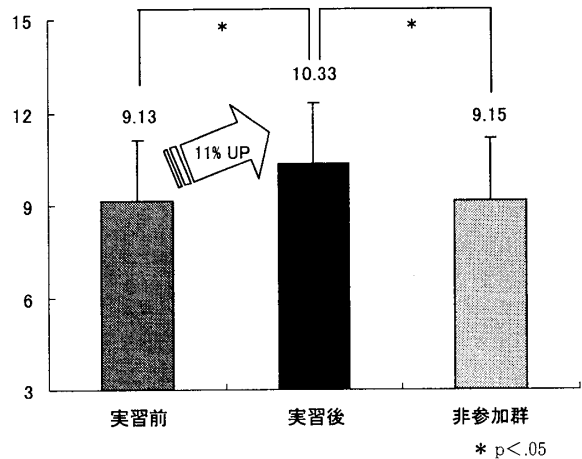


Figure. 4 実習前後での『非言語的コミュニケーション技術』の変化

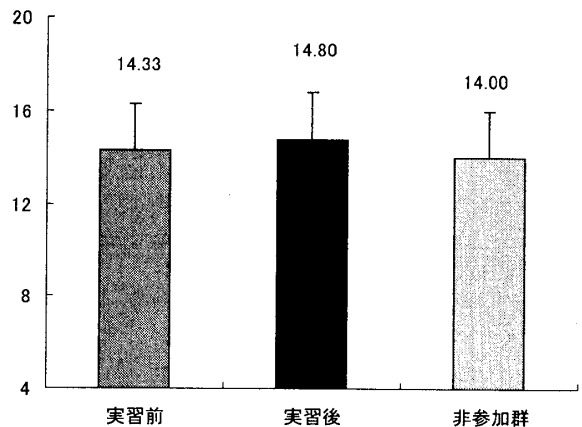


Figure. 5 実習前後での『コミュニケーションによる自己成長についての理解』の変化

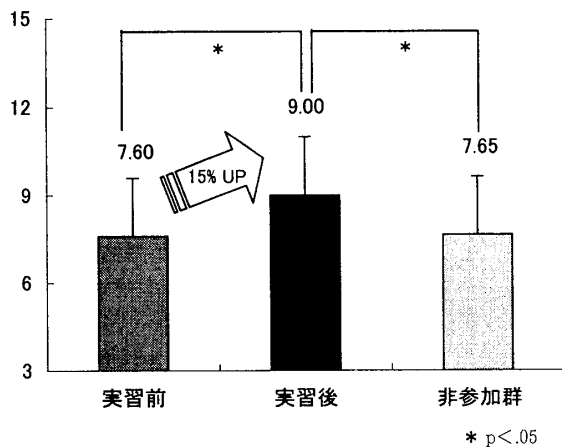


Figure. 6 実習前後での『クライアントの感情の明確化』の変化

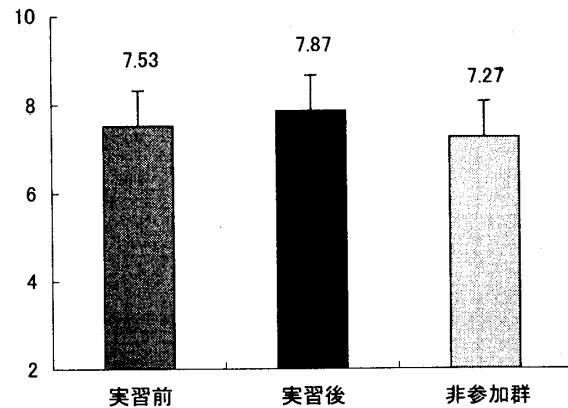


Figure. 7 実習前後での『コミュニケーションに関わる人間観の理解』の変化

Table. 9 コミュニケーション技術評価の下位因子とフェースシート項目との関係性

	コミュニケーションによる自己成長についての理解	
実習に対する不安	n.s.	
友人のサポート	F (4, 37)=3.08	p<.05
教員のサポート	n.s.	
現場指導者のサポート	n.s.	
精神保健福祉ボランティア等の事前体験の有無	n.s.	
精神保健福祉分野の仕事内容に関する魅力	n.s.	
精神保健福祉分野での就労に関する魅力	n.s.	
実習中の相談相手の有無	F (1, 37)=3.85	p<.05
実習での不快体験の有無	n.s.	

n.s. 有意差なし

5. コミュニケーション評価因子に影響する要因の分析

ここでは、上述した結果を踏まえて達成動機に影響を与える要因について検定を加えた結果を示す。

実習前後で有意な変化が認められたコミュニケーション評価の下位因子（「コミュニケーションの基本技術」、「非言語的コミュニケーション技術」、「コミュニケーションによる自己成長についての理解」、「クライアントの感情の明確化」、「コミュニケーションに関わる人間観の理解」）を従属変数、フェースシートで尋ねた項目を独立変数として、両者の関連性を検討した。両者の関連性を明らかにするために一元配置分散分析を行った結果、「コミュニケーションによる自己成長についての理解」と「友人のサポート」(F(4, 37)=3.08 p<0.05)、「実習中の相談相手の有無」(F(1, 37)=3.85 p<0.05)の2つの設問で関連性が確認され (Table. 9)、実習中に

相談する相手がいる実習生、あるいは友人のサポートを得ることができた実習生でコミュニケーションを通じて自己成長を促すことができたと答えていた。

考察

実習生のコミュニケーション技術評価は、「コミュニケーションの基本技術」、「非言語的コミュニケーション技術」、「クライアントの感情の明確化」の3つの因子で、いずれも実習後に10%以上の上昇がみられた。しかし、「コミュニケーションによる自己成長についての理解」と「コミュニケーションに関わる人間観の理解」の2つの因子については、実習による変化は認められなかった。この特徴については、2つの理由が考えられる。まず1つ目に、変化のみられた「コミュニケーションの基本技術」、「非言語的コミュニケーション技術」、「クライアントの

感情の明確化」は、コミュニケーション技術評価の中でも比較的評価しやすい内容であったと推測される。実際に学生が実習目標として設定するコミュニケーション技術の修得については、「信頼関係の形成」、「相手の目を見て話す（聞く）」、「相手に共感的な態度で接する」、「相手の表情やジェスチャーなどを観察しながらコミュニケーションを図る」などの具体的な内容が多く、学生自身で振り返り、評価できるものである。しかし、「コミュニケーションによる自己成長についての理解」、「コミュニケーションに関わる人間観の理解」という内容については、事前に目標として設定されることも少なく、また、事後の振り返り学習のなかで教員や現場指導者からのフィードバックによって理解を深めることが可能になる内容と考えられる。したがって、本調査は、実習終了後1週目に行ったこともあり、自己理解やコミュニケーションを通じた人間観の理解の深化が可能となるまでに必要な時間やその理解促進に必要と考えられる教員、現場指導者のフィードバックが十分に得られていないことが推測される。つぎに、もう1つの理由として、思考過程や感情表現に障害がある精神科領域のクライアントとの言語的コミュニケーションの困難性は、言葉が言葉どおりの意味を持たず文脈が失われ、日常的な判断での解釈が難しい場合もあるため、コミュニケーションの基礎的な技術に関する理解はできたとしての、クライアントとの関係を通じて、自己成長についての理解を深めることや人間観を理解することまでは達成できなかったと推測することができる。つまり、学生自身が発する言葉をクライアントを通じて自己へ返す（フィードバック）することが困難な状況であり、そのためクライアントとの関係においては理解を深めることができなかったと考えられる。一方で、コミュニケーションが意志や感情を伝達するための方法のみでなく、相手に関与するための方法としての側面もあるといったコミュニケーションの多様性を体験的に学んでいると言える。

さらに、実習後に「自分自身を尊重することができる」という項目で低下していたことは、福山²³⁾が指摘する「学生が周りに振り回されて自分をどう捉えて良いか混乱している傾向や、自分を否定的に捉える傾向が強く、自分の失敗に捉われやすく厳し

い自己評価をする傾向があることを示し、自己概念が歪んでいたり混乱していると、相手の話を聞くときにも歪めたり混乱させて聞いてしまいがちである」ということが関係していることが考えられる。つまり、自尊感情の低下によって、相手の問題を自分の問題として捉え、正確に問題の抽出ができ難くする傾向を生むことになることも考えられる。そのため、学生は、短期間の実習では、自己理解や人間観の理解といった自己・他者の認識については困難であったと思われる。しかしながら、これらの内容については断定することができないため、今後の研究課題としたい。

佐治²⁴⁾は、「カウンセリング学習においては、コミュニケーションの技法の習熟も大切ではあるが、その基礎にはクライアントに対する態度や人間的理解の姿勢が不可欠である」と述べている。自己のコミュニケーションを振り返る方法に、カウンセラーが用いる「対話的關係の自己点検」²⁵⁾がある。これは、①自分の価値観、②自分の人間観、③自分の対人関係観の3つの視点から振り返るものである。コミュニケーションを通じて、クライアント-援助者との相互作用によっておこる様々な出来事に対して、自己を客観的に見つめ直す機会を設けることが重要である。

学生自身が対話的關係を自己点検することは有効な教育手法であることは言うまでもない。しかし、一人で自己分析を行うことは困難な場合もある。そこで教員はコミュニケーション技術の評価表という媒体を用いて、実習場面での学生の気持ちを受け止め、言語化を促し、学生自身が陥りやすい傾向を意識化できるように一緒に考えることで、学生自身の学びに繋がったと考えられる。つまり、学生が自信を喪失してしまい意欲の低下を招くことのないような動機づけが重要であるといえる。

一連の振り返り作業を通じて、学生は「自分自身をみつめ直すことができた」「自分を知るきっかけになった」等の感想を述べていた。このような自己洞察は、自己のコミュニケーション技術や対話スタイルを知ることによって、自らの改善の方向性を示していくことは、意志の自己決定の視点からも望ましいことであり、自尊感情の高揚にも繋がると言える。また、自身のコミュニケーションの振り返りに

については、自分の考えや気持ちを「伝える」「相談する」「調整する」という主体的行動につながり、学習への主体性や安心して学べる環境づくりにも繋がるものであろう。

このような意味からも、Figure. 8に示すようにコミュニケーションに関する「評価」を行い、どのような形で実践へ「導入」していくのを検討し、それを実際に「実践」していく流れをルーティン化していくことが、自己・他者理解を深化していく上で重要な学習過程であり、自己の振り返り学習で必要となるプロセスと言える。

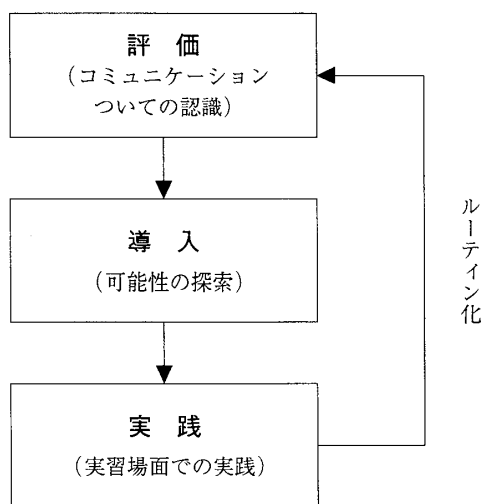


Figure. 8 コミュニケーションを媒介とした自己・他者理解の流れ

最後に本研究の限界と残された課題について述べる。本研究での対象者は39名と数に制限があり、データの一般性に関する問題が挙げられる。しかしながら、本サンプルは、必ずしもすべての実習生に当てはまるものではないが、実習生の現状を把握する上である程度の代表性を確保できたと考える。

本研究では、精神保健福祉援助実習に参加した学生のコミュニケーション技術に対する自己評価と影響要因の内容が明らかになったが、今後、その学生の評価の背後にある様々な要因を明らかにする必要がある。さらにその上で、学生の現状を踏まえた効果的な教育支援が提供できる体制作りや具体的な支援方法の検討も必要とされるであろう。

まとめ

本研究では、現場実習に参加した学生のコミュニケーション技術評価を分析することで以下の点を明らかにした。①コミュニケーション技術の評価する全25項目のうち、11項目で変化がみられ、いずれも実習後に肯定的な評価であった。②コミュニケーション技術評価の5つの下位因子のうち、「コミュニケーションの基本技術」「非言語的コミュニケーション技術」「クライアントの感情の明確化」の3つで技術の向上がみられた。③5つの下位因子のうち「コミュニケーションによる自己成長についての理解」のみ、「友人のサポート」と「実習中の相談相手の有無」の間で関連性が確認された。

以上の結果を踏まえて、コミュニケーション技術評価を実習後の振り返り学習に活かした実習指導のあり方、学生への教育的支援の方法について論じた。

文献

- 1) 荒田寛：「精神保健福祉援助実習」への期待と今後の検討課題。精神保健福祉，2001；第32巻第1号（通巻45号）：9-12.
- 2) 宮崎まさ江：教育機関における「精神保健福祉援助実習」教育のあり方と今後の課題。精神保健福祉，2001；第32巻第1号（通巻45号）：19-24.
- 3) 荒田寛：精神保健福祉援助実習への期待と今後の検討課題。精神保健福祉，2001；第45号：9-18.
- 4) 坂野憲司，長坂和則：精神保健福祉援助実習についての考察Ⅰ。日本教育専門学校研究紀要，2002；第9巻第1号：31-38.
- 5) 宮崎まさ江，小片富美子，藤原正子：「精神保健福祉援助実習」教育のあり方に関する一考察～精神障害者社会復帰施設での学生現場実習結果より～。長野大学紀要，2000；第22巻第2号：73-82.
- 6) 村田久行：教育プログラム「傾聴と発問」実習～ケアの思想と対人援助～。川島書店，1998：55-72.
- 7) 坂本智代枝：精神保健福祉援助実習教育のあり方に関する一考察～学生の初期の「内的なかかわ

- りの過程」の質的分析を通して～. 大正大学研究紀要, 2002; 第87巻: 355-366.
- 8) 岡田洋一, 茶屋道拓哉: 鹿児島国際大学における精神保健福祉援助実習の現状と課題(1)～実習生の自己覚知と成長を中心に～. 鹿児島国際大学福祉社会学部論集, 2004; 第23巻第1号: 39-53.
- 9) 岡田洋一, 茶屋道拓哉: 鹿児島国際大学における精神保健福祉援助実習の現状と課題(2)～実習生の自己覚知と成長を中心に～. 鹿児島国際大学福祉社会学部論集, 2005; 第24巻第2号: 61-73.
- 10) 川野雅: 精神看護学の技法. 南江堂; 26-27, 1999
- 11) 阿保順子: 精神科領域における「コミュニケーション」の特徴と教育の実際. *Quality Nursing*, Vol.2 No.6; 499-507, 1996
- 12) 松本孚: 看護教育における「コミュニケーション」の授業方法と位置づけ. *Quality Nursing*, Vol.2 No.6; 476-483, 1996
- 13) 和泉春美・山下満子・柳川育子: 臨地実習における学生の不安に関する研究(第1報). 京都市立看護短期大学紀要, 第26号; 66-73, 2000
- 14) 山下満子・和泉春美・柳川育子: 臨地実習における学生の不安に関する研究(第2報). 京都市立看護短期大学紀要, 第26号; 75-85, 2000
- 15) 水野芳子・清水光子: 学生は精神障害者をどう受け取ったか. 埼玉県立衛生短期大学部紀要, 第2号; 43-51, 1978
- 16) 大柴弘子: 精神科臨地実習で学生は何を感じ学んでいるか～“気づき”の周辺をさぐる. 信州大学医療技術短期大学部紀要, 第6号; 43-51, 1981
- 17) 小林美子: 実習を通しての学生の学びと気づき, 第4号; 67-73, 1985
- 18) 大柴弘子: 沈黙場面の注目から自己洞察へ～学生は患者に対しなぜ沈黙したか～. 看護展望, 第13号; 21-29, 1988
- 19) 雀部慈美・光木幸子・堀井たづ子: 成人看護実習における学生の自己評価分析. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要, 第9号; 265-271, 2000
- 20) 上野玲子: コミュニケーション技術評価スケールの開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護学教育学会誌, 第14巻第1号; 1-11, 2004
- 21) 八田由美子, 廣房子: 看護場面で生かすコミュニケーションスキルの開発と評価シート活用のポイント～第4回シートを使ってコミュニケーションを判定する～, ナースエデュケーション, 第3巻第4号; 88-93, 2002
- 22) 田尾雅夫: 組織の心理学(新版). 有斐閣ブックス; 118-121, 2002
- 23) 福山清蔵: 独習実践カウンセリング・ワークブック. 金子書房; 54-67, 2000
- 24) 佐治守夫: カウンセリングを学ぶ～理論・体験・実習～. 東京大学出版; 106-108, 1996
-